

ふるさと応援団員からの便り

チューリップの国から

山崎(伊与田)倫代



オランダ在住
中村出身
昭和42年生まれ

夫の転勤でオランダに来て、5回目の冬を迎えています。

当地の冬は暗く、長いです。風の吹き荒れる、灰色の日々が続きます。朝9時近くならないと明るくならないので、起きたらまず家じゅうの電気をつけて回るのが日課になっています。

昨冬は14年ぶりの寒さで、運河が全凍結しました。うっかり車にコーラ缶を入れておいたら、凍って爆発していました。その時の気温は氷点下12度。炭酸飲料を冷凍庫に入れてはいけないというのは知識として知っていましたが、まさか自分の車が冷凍庫と同じ状態になるなんて想像すらしませんでした。

私は中村で生まれ、高校卒業までを過ごしました。大学進学のために東京に出たとき、見渡す限り

に山が見えない関東平野に少し不安を覚えたことを記憶していません。だって、中村にはいつも目を上げると山がありました。

故郷の山々の緑色はなんとなく特徴があつて、私は勝手に「幡多グリーン」と呼んでいます。幡多グリーンに四万十ブルー。鮮やかな「自然に抱かれている」安心感が、故郷にはあるのです。住んでいるときには気づかなかつたことですが。

さて、私のはるか昔に東京で感じた一抹の不安は、オランダに来たとき倍になって甦ってきました。オランダは低く平らな土地です。行けども、行けども山はありません。この国は標高が一番高いところで322m。それもドイツ国境まで行つてようやくその高さです。……山がない。それがこんなに心許ないことだったなんて。

明治末期の新聞記者に、長谷川如是閑(によぜかん)という人がいました。如是閑は、特派員としてヨーロッパへ向かうのですが、シベリア鉄道で満州の平原に入ったときのことをこう書いています。

「この大平面が視覚に入ると視線が全く何の障碍もない自由の放射を擅(ほしいまま)にする事を得

るので、この視覚の放恣(ルーズネス)に自ずと感情の放恣が伴つて、僕その物が無辺際、太虚、永久というような一切の範疇を超越した宙ぶらりに飄然たるかの如く感ずる」

視線が遮られることなく、どこまでも広がっていくことは、日本人にとつてこれほどまで心細さを与えるものなのです。それは100年前の如是閑も、現在の私も同じでした。

そんな折、ドラマ「遅咲きのヒマワリ」が放送されたことはとても嬉しいことでした。当地でもバソコン経由で見えておりました。市民病院の錆だらけの柵越しに見えるのは「幡多グリーン」、鮮やかな東山の山並み。あの山を背景にたこ揚げ大会をしたなあ、マラソンが苦しかったつげなあ、と大変なつかしく拝見しました。

また、ドラマの中で商店街復興に尽力する順一を見ては、地元にいる同級生の顔を思い浮かべました。私は外に出てしまつたけれど、地元でがんばっている友達がいる。さらにドラマと同じように、地域おこし協力隊の人たちがいる。これはなんと心強いことでしょうか。

オランダから四万十へ、大きなエールを送ります。

(翻訳者)